

# パリ島水槽タンク顛末記

## 寄稿

田辺、田辺東、田辺はまゆう、白浜の各ロータリークラブ(会員計約180人)が合同で、インドネシアのパリ島北部の村に水槽タンクを建設する事業を後援。会員が集めた40万円と、4ロータリークラブの上部団体から寄せられた40万円を贈った。「WCS(世界社会奉仕)」と名付けたこの事業で、飲料水の確保が困難な現地の村に水槽タンクが完成したのを機に、メンバー有志が現地を視察。村の人たちと交流した。その様子を4ロータリークラブのガバナー補佐である、村上有司弁護士(田辺市)に寄稿してもらった。要旨を掲載する。

## 4クラブ合同で事業

### 田辺ロータリークラブ 村上有司さん

私たち田辺ロータリークラブは、田辺、参加した17人のうち、田辺東・田辺はまゆう・調不良の2人を残した15人の4クラブ合同で寄贈した水槽タンクの贈呈。人に、地区役員らを加えた17人がメンバーである。式を行うために、パリ島北部にある同島最高峰、フクン山(3170m)の中腹の村を訪ねた。ホテルから車で片道4時間、余りのハードなコースだった。

その晩は地元ロータリークラブ主催の晩餐会が予定されているので、出発時間は午前7時30分と知り合い、国際結婚した。その後、夫の母国に渡り、パリ島で観光・旅行業を始め、今ではタクシーやバス等の運送業にも手を広げている立身伝中の人物である。万起子さんは、通常では聞けない道中案内を熱心してくれ、それによると

①パリ島の面積は愛媛県とほぼ同じ、人口は約350万人、観光客は年間120万人くらい訪れるが、そのうち日本完成した水槽タンク  
△中央の建物の前で現地の人たちと記念撮影



問道に入る。腹にこたえる振動が続いた。パリ島の人々はアング山を母なる山とあがめているが、1963年に大爆発した。大きな黒い石が、所々に見えるのはその名残かもしれない。途中に川のような場所があり、赤い土がむき出しになっている。ここは雨季と乾季が半年毎に繰り返すが、今は乾季で流れがない。逆に、雨季には大水が流れ、付近を荒らしてしまうのだらう。しばらく進むと行き止まりとなり、第一番目の訪問集落「Dukurt」(ドクウ)に着いた。

小さな掘り立て小屋のような住居があり、数人の現地の人々が珍しそうに一行を迎えてくれた。正面にその付近とすれば少し大目目立派な住居があり、貨物車と乗用車が1台ずつあった。万起子さんの説明では、この



子どもたちにも学用品などをプレゼント。教育に対する関心の高さに驚いた

自費した。タンクの正面に、ロータリークラブとともに田辺ロータリークラブほか3クラブの名前が印字されていた。これを見て、一つの事業をやり遂げた満足感がふつふつとわき上がってきた。村長にすすめられ、私たちが集金場のコザの上

に「あれしかった。村長が一声掛けたら、どこに居たのか分らないが、子どもたちも大勢舞台に入ってきた。その大きな音が印象的だった。土産に持っている文房具や折り紙をうれしそうに受け取り、何回も頭を下げてくれた姿が、遠路はるかな訪問だったが、行ってよかったと思った。

## 飲料水確保に喜ぶ住民

集落の中で一番の金持ちで村長の家とのことである。地元の人々の案内で、細い道を少し歩くと、裏の広場に集金場らしき建物があった。20~30人の屈強な男性がコザを敷いて座っていた。集金場の隣に、寄贈した水槽タンク(4m×4m×5m)がほぼ完成していた。中をのぞいて見ると、予想より大きく、相当量の水が貯えられ、住民の助けになると自画

に、地元の人々と対面する形で座った。村長が「同に歓迎とお礼の言葉を述べた。これで水くみ機が稼働すれば、生活からはほど遠いようだが、鉛筆などの文具類は、皆で分けて使わせてもらいます」と話した。自給自足の生活に明け暮れ、教育問題にはそれほど関心がないと勝手に思っていた私は、いさゝか恥ずかしくなった。その後、訪問団を代表

いが、住居状況からも衣類の状況から見ても、決して裕福とは思われない。電気も入っていない。生活からはほど遠いようだが、鉛筆などの文具類は、皆で分けて使わせてもらいます」と話した。自給自足の生活に明け暮れ、教育問題にはそれほど関心がないと勝手に思っていた私は、いさゝか恥ずかしくなった。その後、訪問団を代表





## 2007WCS「CLEAN WATER PROJECT」 田辺RC・田辺東RC・はまゆうRC・白浜RC合同プロジェクト

5月12日(2泊4日)からRI第2640地区主催の「バリ島WCS視察」に、クラブメンバーとその家族17人が参加しました。

田辺・田辺東・田辺はまゆう・白浜の4クラブ合同で、インドネシアのバリ島北部の村に水槽タンクを寄贈。その贈呈式を行うためワグン山(バリ島最高峰の山3,170m)の中腹の村を訪ねました。ホテルから車で片道4時間余り、途中デコボコの山道を延々はいっていきます。電気もありません。水もありません。子ども達は毎日、頭にバケツをのせて山をこえての水汲みが仕事だそうで、学校にも行けません。なら、水のある所に移ればいいのに…と私達は簡単に口にしてしまいましたが、先祖代々が生活してきた土地に家族みんなで暮らせれば幸せなのだと思います。それ以上は望まない、と。自給自足の生活の中で教育に関しては危惧している様子でした。次に私達ができる事は何だろうと考えてしまいます。訪問した2つの集落では、せいいっぱいのもてなしをしてくれました。咽が乾いただろうとヤシの実を割って1人ずつに配ってくれ、名前はわからないけれどホクホクとした湯がきイモ(これはサツマイモの味に似ていてとても美味しいものでした)そしてカシューナッツ、ザクロ…。あたたかい歓迎と可愛い子ども達の笑顔を見ると、本当に来てよかったと思うと同時に、ロータリークラブの「国境を超えた社会奉仕活動」の大きな意義を実感した視察旅行でした。



1番目の訪問集落「Dukult(ドクウ)」  
完成した水槽タンクの前でタマンロータリークラブのメンバーと現地地区ガバナー補佐と。



水槽タンクに刻まれた文字  
「クリーン ウォーター  
プロジェクト 田辺・田辺  
東・はまゆう・白浜クラブ  
2640 ジャパン」



広場をきれいに掃いてゴザを敷き、たくさんの人が出迎えてくれました。





メンバーがそれぞれトランクに入れて持ってきた文房具などのお土産を子ども達にプレゼント。

現地地区のガバナー補佐と子ども達と。



ドクウ村の村長と村上ガバナー補佐（子どもは村長の息子）



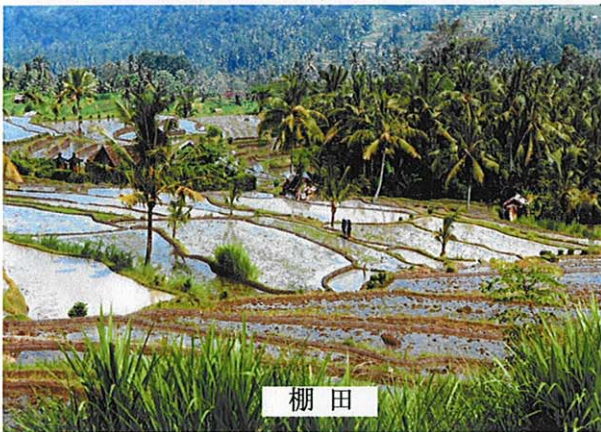
たくさんのヤシの実を割ってもてなしてくれました。スプーンを使って実をすくい、口に入れるとプルプルした食感とほのかな甘みが…とても美味！写真は一生懸命食べる皆瀬さん。現地の人とすぐ仲良くなりました。と言うか、現地の人みたいでした。

スカダナ村では盲目の男性が笛の音を聴かせてくれました。彼はインドネシア国内大会で優勝した笛の名手。



2番目の訪問集落「Sukadane（スカダナ）」で。

右はお風呂（シャワー）  
下は台所



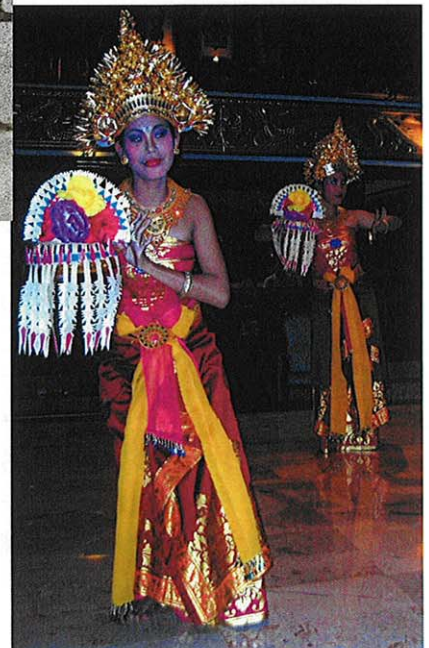
棚田



「神々の住む楽園」バリ島。どんなに小さな店先にも神に捧げる供物がありました。



宿泊ホテル「ニッコー・バリ」



神秘的なバリ舞踏